

歯の治療学（歯内療法学・保存修復学）での体験先導型学習に関する 学生への中間およびポストアンケート調査

Intermediate and Post Questionnaire Surveys to Students about the Experience-
Led Learning in Tooth Therapeutics (Endodontics and Restorative Dentistry)

○諸富孝彦、鷺尾絢子、藤元政考、北村知昭

○MOROTOMI Takahiko, WASHIO Ayako, FUJIMOTO Masataka, KITAMURA Chiaki

九州歯科大学口腔機能学講座口腔保存治療学分野

Division of Endodontics and Restorative Dentistry, Department of Oral Functions,
Kyusyu Dental University

【目的】

「歯の治療学」(保存修復学・歯内治療学)は本学歯学科3年次生が履修する最初の臨床基礎科目であり、テーマ毎に①予習課題の自己学習レポート提出→②シナリオベース臨床基礎体験実習→③実習内容に即した講義→④技術習熟のため定着実習の順に学修を進める体験先導型学習法を唯一採用する科目である(諸富ら、日歯教誌 35, 49-57, 2019)。我々は体験先導型学習法の教育効果を検討するため、本科履修期間に学生を対象とした中間期・ポストアンケート調査を行い、結果を比較・検証した。

【対象と方法】

本研究は九州歯科大学研究倫理審査委員会の承認のもと実施した(承認番号:18-77)。歯の治療学履修期間(4月~7月)のうち5月(中間期)および7月(ポスト期)にアンケート調査を実施した。質問項目は本教科の特徴である予習、講義前の体験実習、自宅学習時間、シナリオベース実習および本教育法の他教科への導入希望とした。

【結果】

講義前に体験実習を行う体験先導型学習を支持した学生は、中間期/ポスト期で67.5%/67.0%、体験実習へのシナリオ導入については86.9%/85.3%、そして本教育法の他教科への導入希望は57.1%/55.8%であり、調査時期による有意差はなかった。予習については「予習の正解が実習終了時まで不明だった」「臨床の場で遭遇するような、患者の訴えや症状から疾患を推測するトレーニングになった」という項目でポスト期に肯定的な意見が有意に増加した。また、予習にかかる時間はポスト期で有意に減少した反面、他の科目を含めた自宅学習時間は増加した。予習に用いる教材はポスト期では成書が有意に減少しWebサイトが増加した。また、他者のレポートを参考にした学生もポスト期に増加する傾向が見られた。

【考察】

本教育方法は多くの学生から支持を得たが、回を重ねる毎に支持者が増加することはなく、中間期とポスト期で差はなかった。予習はポスト期でWebサイトや他者のレポートを参考にするなど安易な方法をとる学生が増加し、予習時間も減少していた。これは、ポスト期は定期試験が近いいため他科目の学習時間を確保するためなのか、あるいは単に楽をするためなのかは不明である。今後は、学生のモチベーションを持続させるための方略を検討する必要がある。